

第5講 学習目標のデザイン

吉村希至（岐阜女子大学・准教授）

【学習到達目標】

- ・ブルームの教育目標分類について、行動目標による例を取り上げて説明できる。
- ・ガニエの学習成果の5分類について、具体例を挙げて説明できる。
- ・明確な学習目標について、具体的な単元において説明できる。

1. 学習目標を明確にする

授業づくりは、まず学習目標を適切かつ明確にすることからスタートする。学習目標とは、学習者が、わかるようになること、できるようになること、身に付けることなど、教師が授業でねらいとすることを、より具体的な形で表し、わかったか、できるようになったか、身に付いたかを判断できるように書かれたものである。

授業設計は、すべての学習者が目標を実現できるように、それに向けた計画を立てることである。学習目標が不明確であると、授業で何を目指して、どのように授業を進めていくのか、適切な教材は何かなどが不明となる。学習目標を明確にすると、その目標自体が適切なかどうか、学習者にとって実現可能なかどうかなどの検討も可能になってくる。また、学習目標は、どの教師も共有できるはっきりとした表現で示すことが求められる。どのような判断で学習目標が実現できたか、一人一人の学習者の見取りをどの教師も共通して行えることが重要である。明確な学習目標は、教師チームによる授業設計、授業評価にとっても不可欠で、そのことが授業改善につながる。

本講では、授業設計の最初の段階で行う、学習目標の明確化について説明する。明確な学習目標の設定のあり方と、授業設計の検討すべき内容について述べる。

2. 学習目標の分類

＜ブルームの教育目標の分類体系＞

授業設計をするにあたって、明確な学習目標を設定することが求められる。BS.ブルームらは、教育活動を通じて追求する目標を、認知的領域、情意的領域、精神的領域の3つに分類した。それに関わって、それぞれの領域でプロセスによりレベル分けし、教育目標の分類体系（タキソノミー）を作成した。（表5－1）

表5－1 ブルームの教育目標の分類体系

評 価 Evaluation		
統 合 Synthesis	個性化 Characterization	自然化 Naturalization
分 析 Analysis	組織化 Organization	分節化 Articulation
応 用 Application	価値づけ Valuing	精密化 Precision
理 解 Comprehension	反 応 Responding	巧妙化 Manipulation
知 識 Knowledge	受け入れ Receiving	模 倣 Imitation
認知的領域	情意的領域	心的運動的領域

ブルームらの分類体系による目標分析は、目標を2次元マトリックス上で分析する。例えば、認知的領域をみると、情報を記憶することに関する知識から、新しい情報についてコミュニケーションを通して取り入れる理解、さらに、応用、分析、統合、評価と階層的に分けている。カテゴリーは、単純なものから複雑なもの、具体から抽象へと並べられ、累積的な階層を意味する。各カテゴリーにおける行動目標による具体例をあげると次のようになる。知識については、歴史で重要な出来事の年や主な人物の名前が言える。理解については、資料等で示された歴史的な出来事の短い要約が書けたり話したりできる。評価については、2つの考え方のうち、どちらが問題を解決するのによりよい方法であるかを判断できる。目標を分析的に捉えることにより、何がわかり、何ができるようになるとよいかなどについて具体的に明らかにすることにつながる。（第4章）

<ガニエの学習成果の5分類>

R.ガニエは、ブルームのタキソノミーを拡張して、学習成果の5分類を示した。ガニエは、学習成果を、言語情報、運動技能、知的技能、認知的方略、態度の5つに分類している。（表5－2）

表5－2 ガニエの学習成果の5分類

言語情報	物事・名称を覚える
運動技能	体を動かして身に付ける
知的技能	ルールを理解し活用する
認知的方略	学び方を工夫する
態度	気持ちを方向付ける

この5分類による学習目標の分析は、各教科や領域の学習目標の設定にも応用が可能となっている。また、学習指導要領に示されている学力の3要素と対応関係があり、実際の授業設計をする上で、この考えを用いて記述することにより、学習目標をさらに明確にすることになる。ガニエの5分類と学力の3要素、観点別評価の観点の関係を次に示す。（表5－3）

表5－3 ガニエの5分類、学力の3要素、評価の観点の関係

ガニエの 学習成果の5分類	学習指導要領で示された 学力の3要素	観点別学習状況・ 評価の観点
言語情報	基礎的・基本的な 知識・技能	知識・理解
運動技能		技能
知的技能	思考力・判断力・ 表現力等	思考・判断・表現
認知的方略		
態度	主体的に取り組む態度	関心・意欲・態度

この5分類を基に、目標行動として学習者の行動を観察可能な状況で示していくことが有用である。学習目標を5分類で示した目標行動で分析することにより、学習目標が目に見える形で具体化され明確になる。このことは、明確な学習目標の設定、効果的な授業設計を可能にする。これにより、学習目標に応じた適切な教え方や、評価の仕方が明らかになり、目標が実現できたかの評価や新たな授業改善へつながる。

3. 「目標と指導と評価の一体化」からの検討

学習者が、学習目標を実現できるようになることを目指して、私たちは、計画的、系統的、意図的に効果的な指導を累積して授業を展開していく。その過程や結果において、学習者の学びや育ちを評価し、学習目標の実現状況に応じた授業改善や指導の徹底を図っていく。目指していない目標や目標として値しない目標を評価することは意味がない。実現を目指す学習目標と実現状況の確かめである評価は、表裏一体であり、学習目標の実現の成果をあげるために指導がある。つまり、「指導と評価の一体化」では十分でなく、「目標と指導と評価の一体化」（いわゆる「PDCA サイクル」）でなければならない。例えば計算のテストを行い、採点し点数を記録し学習者に返却して終わりであるなら、学習目標を実現したことにならないし、指導者は学習者に対して責任を果たしたことになる。採点時に、誤りを分析し、指導者はそれに応じた指導を行い、学習者が計算の意味を理解し、正しく計算できるようになるまで指導したり、授業改善を図ったりすることが重要である。（図5－1）

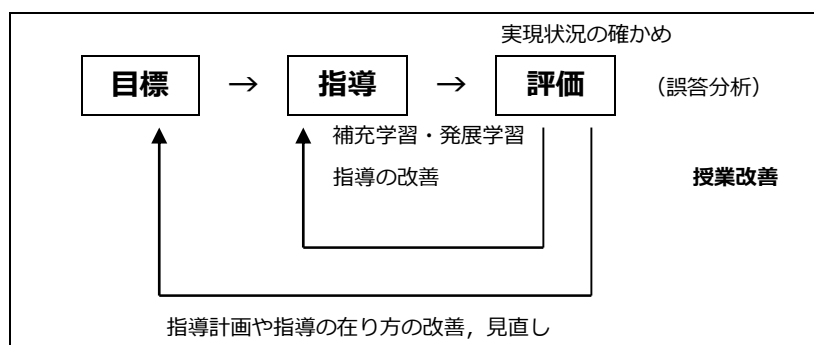
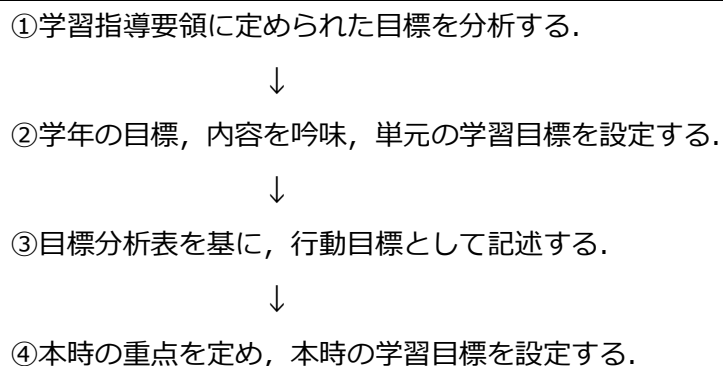


図5－1 目標と指導と評価の一体化

「目標と指導と評価の一体化」において、学習目標が明確であることが不可欠である。具体的で明確でない学習目標は、実現意識や計画性の弱さをもたらす、評価の曖昧さ、見過ごして学習を進めること、学習改善がされないことにつながる。どのような学習目標の実現を目指すのか、明確な学習目標の吟味、検討が求められる。

5. 明確な学習目標を設定する

明確な学習目標設定の流れは次のようである。



学習目標の記述にあたっては，前述したガニエの学習成果の5分類による学習者の行動を観察可能な形で示した行動目標で表す。また，教科書に示された展開にしたがって授業を展開する場合には，目標分析による目標の吟味，検討の必要はあまりない。しかし，教科内容に精通し，学習者の実態を把握し，それに即して指導を創造，工夫した学習展開をしようとするなら，目標分析は必要である。

【ワークショップ】

ガニエの学習成果の5分類をもとに，各教科や単元を例にとつて，グループで明確な学習目標を設定して発表しなさい。

【参考文献】

- (1)マルザーノ他著：教育目標をデザインする 北大路書房
- (2)稲垣忠・鈴木克明編著：授業設計マニュアル 北大路書房
- (3)梶田叡一・加藤明監修：実践教育評価事典 文溪堂